「かすみ」詠の変遷

――和歌表現の展開と漢詩――

安田徳子

自然との交歓は、和歌を生み出す重要な契機であった。特に、四季の変化に敏感であったから、折々の自然の景物は、いつも和歌の代表的素材であり、多くの強い季節感を伴う歌語を生み出した。しかし、繰り返される四季の自然を捉えた歌語であっても、時代によって、歌人によって、その表現はさまざまに変化した。その背景には、さまざまな要因が考えられるが、本稿では、春の代表的歌語の一つである「かすみ」を取り上げ、その表現の変化を検討することによって、歌語の発達の一様相を具体的に分析し、和歌表現の変容をみてみたいと思う。

（一）

さて、「万葉集」及び勅撰集に詠まれた「かすみ」詠は、表一の如くであり、「かすみ」は、「万葉集」から各歌集に満遍なく詠まれてきた素材であることがわかる。「かすみ」詠で確認できる最も古い例は、品田悦一氏の御指摘によれば、「柿本人麻呂歌集」の略体歌（1898・2430）であって、人麿以前に確かな「かすみ」詠は見出せないという（「万葉集自然表現事典」の「霞」の項）。すでに漢語「霞」との関わりから、「かすみ」の季節感と色彩表現については別稿[1]で検討したが、「万葉集」には、秋の「かすみ」詠があり、古くは「かすみ」は必ずしも春の現象だけを表す語ではなかったようだ。それでも「万葉集」七八例の内、六三例が春の詠と認められ、さらに、巻十の春雑に「詠霞」・春相聞に「寄霞」の題で「かすみ」を詠じた歌が収められているように、早い時期から春と最も関わりの深い表現であったことは確かであり、天平頃には春の現象を表す語として定着していったと考えられる。また、先の「詠霞」「寄霞」ではないが、「万葉集」

の「かすみ」の表記は、音表記の場合と3338（「煙」で表現）を除いて、全て「霞」で表現されている。しかし、「霞」の字は、本来は朝夕の日に輝く赤い雲であって、季節感を示す要素を持たないとともに、色彩のイメージと強く関わった語であった。「説文新附」に「赤雲気」とあり「太平御覧」などの中国の類書の用例も「丹霞」「朝霞」とある。ところで、『中国文学歳時記』（一九八八・一〇　同朋舎）には、「春がすみ」の項が設けられている。これによると「空気中に薄い霧のようなものを生じ、こまかい雨が降るが、それを多く「煙」の字で表し、やわらかで、新鮮な感じをともなっている」とあって、「かすみ」に当たるのは「霞」ではなく、「煙」で表現されるものと指摘されている。「万葉集」の「かすみ」は、「霞」の字を用いながら色彩・光に関した表現はほとんど見出せない一方、「煙」は、僅か一例にしか使われていない。「かすみ」は、漢語「霞」または「煙」とはずれがあり、和語独自の意味を表現しているように思われる。

「万葉集」の「かすみ」は、表に示したように「たなびく」「たつ」と表現された場合が非常に多い。特に、「たなびく」の詠は三八例、「万葉集」の「かすみ」詠の半数近くである。これらを見ると、例えば、(2)

1　春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む　（738　坂上大嬢）

2　ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立たつらしも　（1816）

3　遠山に霞たなびきいや遠に妹が目見ねば我恋ひにけり　（2430）

などとあり、詠者は山に「たなびくかすみ」を見渡す地点から捉えて詠じている。「万葉集」において、「たなびく」の語は、「かすみ」の他では「雲」「煙」「霧」の表現に使われて、それらが横に長く広がった状況を表現しているが、「霞」の場合もこれらと共通の捉え方と言ってよかろう。

また、「たつ」と表現された「かすみ」詠は二六例あるが、これらには、

4　霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　むらきもの　心を痛み　ぬえこ鳥　うらなけ居れば　玉だすき　かけのよろしく　遠つ神　我が大君の　行幸の　山越す風の　ひとり居る　我が衣手に　朝夕に　かへらひぬれば　ますらをと　思へる我も　草枕　旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の　海人娘子らが　焼く塩の　思ひそ焼くる　我が下心（5軍王）

5　霞（可須美）立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅

の花かも（850 淡理）

6　霞立つ春の永日を恋ひ暮らし夜もふけ行くに妹も逢はぬかも（1898）

などがある。「たつ」の場合、「かすみたつ」から「春」「春日」「春日の里」と続く表現が一〇例もあり、これらは類型的であり、具体的な「かすみ」の風景の描写とは考えにくい。「たつ」の語も「たなびく」と同様に、「雲」「煙」「霧」の描写に多く用いられており、「万葉集」の「かすみ」は「雲」「煙」「霧」と非常に類似した捉え方であったことがわかるが、「たつ」の場合、他に、「真木」「檀」などの木の描写や「炎」の描写に用いられており、空間の縦の広がりを捉えているように見える。しかし、最も多い例は「波」、また「月」にも用いられ、さらに「人」「鹿」「鶉」にも用いられている。これらの場合は、「現われる」「出現する」などの意とみるべきであろう。さらに、「春たつ」「年たつ」などとも使用されているように、時間を背景とした場合にも用いられるようである。こうしたことから、「かすみたつ」の表現は、空間の表現というより「かすみ」の出現を表現する語とみるべきであろう。また、例えば、

7　霞立つ天の川原に君待つとい行き返るに裳の裾濡れぬ（1532 憶良）

ともあるように、「かすみたつ」も春のみの表現でなかったことも確かである。

8　霞立つ野の上の方に行きしかばうぐひす鳴きつ春になるらし（1474）

などのように、「かすみ」の立つ春の風景を繰り返し詠じているうちに、「かすみ」の現われる風景が、春の典型として類型化されてしまったのであろう。さらには現実の風景から完全に離れ、春の象徴的表現として「春」「春日」にかかる枕詞ともなっていったものと思われる。

「たつ」のみでなく「たなびく」にも類似した表現はしばしば見出すことができ、やはり春らしさを象徴する表現として、類型化していたとみてよかろう。品田氏が最も古い歌と指摘した3・6を始め、2も「柿本人麻呂歌集」の詠であり、5も表記によれば「軍王」の詠だが、古い伝承歌と考えられる。したがって、「かすみ」はすでに「万葉集」に詠み始められた時期から、「たつ」あるいは「たなびく」と表現されてきたようだ。ただ、「かすみたつ」が「かすみ」の出現・存在に焦点が当てられた表現であるのに対して、「かすみ」の状態を具体的に表現しようとしたのが「かすみたなびく」であり、「かすみたつ」に比べるとこの方が実景に結びついた表現ではあったと思われる。

「万葉集」では、ほとんど「たなびく」「たつ」と表現されていて、より具体的な「かすみ」の属性を示す表現は多くないが、なかに「かすみたつはるひのきれる」（29）や「みやこもみえずかすみたなびく」（4458）とあるように、「かすみ」の出現によって風景が不透明に朧化されたり、その向こうの風景が詠者の視界から遮断されているというイメージを伴う場合が多い。「たなびく」「たつ」以外の表現にも「はるされば かすみがくりてみえずありし」（2109）などとあるもそのあたりをよく表している。また、「かすみ」を「かすむ」という用言によって表現したものが、「万葉集」には二例ある。「かすむ」の語は「翳」「掠」にも通う語であり、「物の形や音、声などがぼやけてはっきりしない状態になる」（日本国語大辞典）ことを表すが、この二例は、

9　春の日の霞める時に墨吉の岸に出で居て…
（1744　詠水江浦嶋子）

10　うちなびく春を近みかぬばたまの今夜の月夜霞み（可須美）
たるらむ（4513　三形王）

で、これらも春の朦朧とした不透明な情景を表現している。

このように見てくると、「かすみ」は不透明に風景を朧化させて漂うものを表現していたといえよう。

（二）

ところで、「かすみ」の表記が「霞」と結びついたのは、「万葉集」成立以前であることは確かだが、いつのことか明らかではない。しかし、前項で見たように、「かすみ」と「霞」の意はずれており、「霞」の表記が持ち込まれることで、「かすみ」のイメージにも影響が齎らされた。例えば、別項[3]で検討しておいた「かすみ」の色彩のイメージなどがこの影響であるし、「かすみながるる」（万葉集1825）などは漢語「流霞」から生まれた語である。「風土記[4]」を見ると、「かすみ」が三例見出せるが、これらは、「霞」が表記に持ち込まれた契機を窺わせて興味深い。

11　天の原ふり放けみれば霞（加須美）立ち家路まどひて行方知らずも（「丹後風土記」逸文）

12　時に、霞、四もを含めて物の色見えざりき。因りて霞の里といひき。今、賀周の里と謂ふは、訛れるなり。（「肥前国風土記」）

13　郡の南二十里に香澄の里あり。…「海は即ち青波浩行ひ、陸は是丹霞空朦けり。国は其の中より朕が目に見ゆ」とのりたまひき。時の人、是に因りて、霞の里と謂へり。
（「常陸国風土記」）

である。いずれも季節感はないが、11・12は「万葉集」の「かす

み」に近く、朦朧として視界を遮るものを表わしている。ところが、13は「かすみのさと」という地名の由来として「丹霞空朦」の地であったと記している。これは「青波浩行」と対になっていて、赤い色が問題にされており、朦朧としたイメージも伴っていないので、漢語「霞」の影響が窺われ、和語「かすみ」とは異なったものである。「常陸国風土記」は漢文体で記されており、表現に漢語の影響を強く受けていると思われるので、本来の語りではなく、漢文体で書き留められた時点で生じた表現であろうか。しかし、「国は其の中より朕が目に見ゆ」とあるので、「霞」に囲まれた地というイメージが認められる。これは12にも共通して認められるイメージである。漢語「霞」を見る時、例えば「河図曰崙昆山有五色水赤水之気上蒸為霞而赫然」（太平御覧　巻八）などとあって、仙境に漂う赤雲というイメージがあるが、これと前項で見てきた「かすみ」の向こう側の情景を遮断するイメージが結びついて、「霞」で「かすみ」を表現する方法が生まれてきたのではなかろうか。死者の赴く地を「かすみの谷」（古今集　846）と表現したりするのは、原初に近いイメージと関わっていると思われる。

しかし、「万葉集」では、「霞」と表記されても、その影響はそれほど顕著ではなく、「かすみ」は依然として独自の意を表現していたと見るべきである。

（三）

ところで、前述の3は、遠山を朧化する「かすみ」を詠じているが、その情景が詠者と遠山をより一層隔てた感覚を起こし、それが恋人と隔てられた詠者の心を象徴している。この3のように、「万葉集」では、「かすみ」の朧化した情景は、春の景物として詠まれるばかりでなく、多く恋の叙情と結びついて、憂欝感・哀感を表現したものが多い。巻十「春相聞」のうちに「寄霞」の項が見られるのはそうした事情をよく示している。

14　春霞山にたなびきおほほしく妹を相見て後恋ひむかも
（1913）

例えばこれも、逢いたい恋人と隔たった気持ちを「かすみ」によって具体的なイメージに転化しているのである。さらに、4・6では、逢えない恋の苦しさを、「かすみ」で朧化した春の長い一日で具象化している。「かすみ」が詠者の視野を遮断したまま漂い続ける状況が、恋の焦燥感を表している。

また、前述の1や、

15　心ぐきものにそありける春霞たなびく時に恋の繁きは
（1454　坂上郎女）

も、「かすみ」の情景によって恋に悩む心を表現している。しかし、これらでは、遮断された向こう側への思いと共に、詠者の遮蔽され、鬱積した心が表現されている。3や4・6・14は視点が隔てられた恋人への思いに向かっているのに対し、1や15は恋に悩む自己の内面の表現に向かっている。

16　心ぐく思ほゆるかも春霞たなびく時に言の通へば
（792　家持）

これは、1・15と同様「こころぐく」という語を用い、この二首と類似した心情を表現しているが、恋詠ではない。これに象徴されるように、後者では、詠者の憂情の原因的な位置にあるのは、恋情ではなく「かすみ」のそのものである。朦朧として晴れない「かすみ」の情景が、倦怠とも言うべき憂情を催させる。前者では「かすみ」の憂情は恋情の反映であるが、後者では「かすみ」それ自体が詠者の心を傷つけているのであって、もはや恋情は主情ではない。さらに後者は、

17　春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも
（4314　家持）

などとも基盤を同じくする。この詠ではさらに、夕暮の不透明さが加わって憂欝感が余計強調されるのである。　17はこれに続く4315・4316の二首とともに、「春愁」を表現した家持の秀詠として知られたものである。これらの詠は、4316の奥に記された「毛詩」を利用した左注「春日遅々に、鶯鶏正に啼く。悽惆の意、歌に非ずしては撥ひ難きのみ。よりてこの歌を作り、式て締緒を展ぶ。」によっても明らかなように、漢詩文の強い影響を指摘されている。前者が「柿本人麻呂歌集」略体歌を初め、比較的古い伝承歌であるのに対して、後者は家持あるいはその周辺の歌人の詠に限られているから、これらの詠は、家持らが漢詩文の影響を吸収して見出した新しい表現と言えるかもしれない。

「春愁」は、中国で六朝以来しばしば詠じられてきた詩情であるが、『中国文学歳時記』春上解説（入谷仙介）にも

古くから春は女性が男性をしたって物を思う季節とされていた。それに対して、秋は男性が悲哀に沈む季節とされている。『詩経』の「七月」の詩に「春の日は遅々たり、蘩を取ること祁祁たり、女心傷悲す、殆めて公子と同に帰らん」、毛萇はここに注して「春は女悲しみ、秋は士悲しむ。その物に感じて化せるなり」といい、鄭玄はさらに敷衍して「春は女の陽気に感じて男を思い、秋は士の陰気に感じて女を思う。是れ其の物に化せられて悲しむゆえんなり」という。「春は女悲しみ、秋は士悲しむ」というのは、漢代にはことわざのように使われていたらしく、『淮南子』にも「春は女

思い、秋は士哀しむ」と、ほとんど同じことばが見られる。とあるように、中国漢詩においては、「春愁」は女性の恋情を背景として成立した詩情であった。となると、今まで見てきた「かすみ」詠も、恋の憂欝感を詠じたものがほとんどであったから、後者のみならず、これら多くの詠に中国漢詩文の表現の影響が認められるかもしれない。しかし、同じく『中国文学歳時記』の「春がすみ」の項にも指摘されているように、朦朧とした情景を詠じた詩は中国では唐以後の詩に多い。中でも、「春愁」を詠じたものは、王維や王昌齢などにも僅かに見えるが、晩唐の杜牧・韋荘・温庭筠の詩に多い。ところが、「万葉集」では、恋歌以外にもすでに人麿が、

18　…大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと言へども　春草の　しげく生ひたる　霞立ち　春日の霧れる　ももしきの　大宮所　見れば悲しも（29）

と春の憂いを詠じている。この詠について小島憲之氏[5]が「春草」に焦点を当てて検討し、中国詩文の「春愁」と通う点は多いが、18のほうがはるかに先行しており、人麿独自の詩境と指摘している。さらに、恋歌の多くも中国詩文に先行しているので、その直接の影響は認めがたい。したがって、「万葉集」で「かすみ」によって憂欝感を詠じたのは、和歌独自の表現であった可能性は高い。その後、前述の14などの如く、独自に発達した和語「かすみ」の表現と、中国漢詩文の「春愁」の表現が一体化し、家持周辺により、内省的な表現が、改めて生まれてきたと考えるべきではなかろうか。

（四）

次に、「古今集」の「かすみ」詠を見ると、三〇首中、春以外の季節歌はない上、春上下に収められた叙景歌が一四首もあり、恋部には僅か三首しかない。「万葉集」と分類形式が異なるとは言え、春の叙景歌としての「かすみ」詠の発達が窺われる。

19　春霞たてるやいづこみよしののよしのの山に雪はふりつつ（3よみ人しらず）

の如く、「かすみ」は春を告げる素材として意識されていることが知られる。「古今集」でも、「たなびく」「たつ」の表現が多いが、「たつ」と表現された詠が最も多く、「たなびく」が最も多かった「万葉集」とは微妙に変化している。「万葉集」で検討したように、「たつ」は「かすみ」の出現を捉えた語で、「たなびく」は具体的な「かすみ」の状態を表現する語である。「古今集」では、春を告げる素材として「かすみ」の現われることが最も注目に値したのであろう。また、

20　霞立つ春の山べはとほけれど吹きくる風は花のかぞする
（103元方）

21　春霞なにかくすらむ桜花ちるまをだにも見るべきものを
（79貫之）

などを見ると、「かすみ」は花を隠すものである。視界を遮断するものとしての「かすみ」のイメージは「万葉集」から連続している。しかし、「万葉集」では、その「かすみ」の属性は、多くの場合、恋人と隔てられた恋情に重なっていたが、「古今集」の恋情と結びついた詠は、覇旅・恋・雑部の八首であるのみで、春部に収められた詠は、20や21のように花や雁を隠す叙景の描写に留まっている。「古今集」の「かすみ」詠は、叙情と叙景の分離が顕著である。20・21では、詠者の関心は「かすみ」の向こうの「花」で、それから視野を遮っている「かすみ」の状況ではない。「古今集」では、「たつ」「たなびく」の他、「かくす」「たちかくす」「こむ」などの表現で、自然の景物を擬人化し、「かすみ」に遮られた向こうの素材を中心に据えて詠じているのである。これらでは眼前に向こうの素材は見えない。「かすみ」の向こうに「花」を想像するのは詠者の心である。鈴木宏子氏[6]が「古今集」における〈景物の組合せ〉の特長として、「自然の種々の相の中から景物を抽出し、その景物を自らの観念によって新たに組合せ、再構成して、もう一つの自然を想像していくのである。」と指摘するように、「かすみ」の叙景歌は、詠者の心を通して春の景物を組合せた結果だが、「万葉集」とは異なり、詠者の叙情を分離したところに成立している。また、叙情歌にしても、例えば、

22　山ざくら霞のまよりほのかにも見てし人こそこひしかりけり（479貫之）

などとあって、遮蔽された詠者の内的憂情が強調されることは少ない。したがって、家持のような「春愁」を詠じたものは見出すことができない。

このように、「かすみ」詠は、「万葉集」から「古今集」へ一面では属性を継承しながら、大きく詠歌の方法が変化した。これは、叙景と叙情を分離しようとする古今歌人の歌を作る意識と関わっていたのではないか。屏風歌の発達など、詠者の現実なしに景物の提示だけで歌を作る必要性が、こうした方向を発達させたのであろう。

（五）

23　花の色はかすみにこめて見せずともかをだにぬすめ春の山かぜ（91宗貞）

さて、この詠では、「かすみ」は「こむ」の主体ではなく手段で

ある。一首の主体は「山風」であり、詠者の関心は「花」にあり、「かすみ」はその周辺を彩る素材でしかないが、他の景物が、「かすみ」とどう関わっているかが、具体的に示されている。前項で見たように、「古今集」では、詠歌の中心はむしろ「かすみ」ではなく、「かすみ」に隠された景物であった。中でも、この一首は「かすみ」を中心的景物として捉える見方からも転換している。こうした詠は「古今集」ではこの一首だけだが、この捉え方の転換によって、「かすみ」は多彩な表現を獲得したように思われる。次の「後撰集」では、

24　山高み霞をわけてちる花を雪とやよその人は見るらん
（90読人不知）

25　菅原や伏見のくれに見わたせば霞にまがふをはつせの山
（1242読人不知）

の詠がある。これらでも、「かすみ」が視界を遮るというだけでなく、他の景物との具体的な関わり方が詠じられている。

「後撰集」「拾遺集」では、「古今集」同様、まだ「たつ」が圧倒的に多いが、三代集以降では、「たなびく」ばかりでなく、「たつ」も少なくなり、それぞれに具体的な「かすみ」の状況を示す新鮮な表現を見出している。特に「千載集」「新古今集」のころになると、

26　なにはがたしほぢはるかにみわたせば霞にうかぶおきのつり舟（千載集1049円玄）

27　くれて行く春のみなとはしらねども霞におつる宇治のしばぶね（新古今集169寂連）

28　おほよどの浦にかりほすみるめだに霞にたえて帰る雁金
（同1725定家）

といった独特の表現を生み出すこととなった。26では、海が「かすみ」に朦朧として見えず、沖の釣り舟が、まるで「かすみ」の中に浮かんでいるように見える状況を表現しているのであり、27も同様に、「かすみ」に煙っている宇治川を柴舟が下って行くのを表現している。28は「かすみ」の中に辛うじて見える帰雁の姿を擬人的に表現している。これらにおいては、「かすみ」はこの歌の景のベースであるが、一首の焦点においた景物との関わりに独特のイメージを持ち込んでいるのである。「新古今集」以降の勅撰集でもこれに類した表現は、「かすみにむせぶ」（新勅撰集13俊成）・「かすみにくもる」（同47丹後）・「かすみにあまる」（同59寂連）・「かすみにのこる」（続古今集45後鳥羽院）・「かすみにゆるす」（同75家隆）・「かすみにふれる」（続拾遺集9家隆）・「かすみにつづく」（続後拾遺集31良経）・「かすみにもるる」（風雅集30定家）・「かすみにほふ」（同77後鳥羽

院）・「かすみにくるる」（同117為兼）・「かすみにおもき」（同250光厳院）・「かすみにかをる」（新千載集41俊成）など数多く拾うことができるが、ほとんど「新古今集」の時代の歌人の表現である。「古今集」の時代に芽生えた「かすみ」の表現方法が、時代を経て「新古今集」時代の特徴的表現を生み出したといえよう。

また、こうした「かすみ」を背景に移した詠じ方は、例えば22の「かすみのま」のような、体言においても新しい表現を生み出している。これは、それまで「かすみ」が漠とした全体として捉えられていたのに対して、「かすみ」の間の狭い一点に視点を集中させて、その向こうにあるものを捉えた表現であった。この種の表現は、「後撰集」には見当たらないが、「拾遺集」の、

29　おぼつかなくらまの山の道しらで霞の中にまどふけふかな
（1016安法）

に、「かすみのうち」（安法法師集では「かすみのなか」とある）の語を見出す。これまでの「かすみ」詠は、詠者が「かすみ」から距離を置いた視点で捉えていたのに対して、これは詠者が「かすみ」の中に身を置いているのであって、全く視点を逆にすることで、今までになかった表現を得たのである。

こうした表現も、「新古今集」になって急激に増加している。

30　なごのうみのかすみのまよりながむればいる日をあらふおきつしらなみ（新古今集35実定）

31　見わたせば霞のうちもかすみけり煙たなびくしほがまのうら（同1611家隆）

32　はなはみな霞のそこにうつろひてくもにいろづくをはつせの山（新勅撰集114良経）

33　あかしがたゐじまをかけてみわたせばかすみのうへもおきつしらなみ（続古今集49俊成）

34　さくらがりかすみのしたにけふくれぬひとよやどかせはるのやまもり（同115定家）

これらは、風景を朧化させている「かすみ」の一部分や内面に焦点を当てて、複雑で微妙な叙景を捉えている。この表現は「玉葉集」「風雅集」のころ、さらに多様化し、盛んに詠じられるようになった。

35　山もとの霞のそこのうす翠あけて柳の色になりぬる
（玉葉集91兼行）

36　みどりこき霞のしたの山のはにうすき柳の色ぞこもれる
（風雅集91光厳院）

35・36は「かすみ」の風景の一点を印象的な色彩感で捉えている。別稿[7]ですでに指摘しておいたように、「かすみのいろ」（玉葉集

5・9）に象徴される「かすみ」自体の色彩感を詠じたものも、この頃には多い。

37　はれゆくか雲とかすみのひまみえて雨ふきはらふ春の夕かぜ（風雅集120徽安門院）

38　山とほき霞のにほひ雲の色花のほかまでかをる春かな（同159実兼）

また、37は春雨に煙る風景が動的に捉えられ、それまでの朧々とした静的風景とは、かなり異質のイメージを持つ。38は「かすみ」と「にほひ」が結びつくことで、共感覚的表現を獲得している。こうした新鮮な表現のほとんどは京極派歌人の詠であり、このグループの表現の新しさが窺われる。

37ではないが、動的表現は京極派詠の特長の一つであるが、これは「かすむ」という「かすみ」の動化した表現の発達にも見られ、

38　めにちかき庭の桜の一木のみ霞みのこれる夕暮の色（玉葉集210九条左大臣女）

などの印象的詠を見出すことができる。しかし、

39　松の雪消えぬやいずこ春の色に都の野べは霞みゆく比（玉葉集20定家）

40　見わたせばむらの朝けぞ霞みゆくたみのかまども春に逢ふ比（同21後鳥羽院）

これらの詠からも知られるように、「かすむ」についてはすでに新古今時代の歌人達が、独自の表現を獲得していた。「かすむ」は早く「万葉集」にも例があったが、「古今集」には一例（210読人不知）見られるのみで、「拾遺集」ころから増加している。さらに、「千載集」になると、

41　山ざとのかきねに春やしるからんかすまぬさきに鶯のなく（6隆国）

42　煙かとむろのやしまをみしほどにやがても空のかすみぬるかな（7俊頼）

といった「かすみ」の変化する状況をよく表現した詠が見える。41は否定の表現を使って「かすむ」前を捉えるが、「かすまぬさき」と表現することで、イメージに、続く時の「かすむ」情景が加えられるのである。また、42は「かすみ」の時間に添っての変化と「やしま」から「空」という空間の変化を敏感に捉えている。さらに「新古今集」では、「かすむ」は飛躍的に増加している。

43　おほ空はむめのにほひにかすみつつくもりもはてぬ春のよの月（新古今集40定家）

44　あふ坂やこずゑの花を吹くからに嵐ぞかすむ関の杉むら（同129宮内卿）

これらでは、43は「かすむ」原因として「むめのにほひ」を挙げ、44では「かすむ」のは「嵐」といった共感覚の表現を利用して、複雑な空間での変化が詠まれている。40や41のような時間の変化を捉えた詠も詠まれており、動的表現を生かしたものが多い。したがって、「玉葉集」「風雅集」の新鮮な「かすみ」詠は、「新古今集」の表現を発展させたものと位置付けることができる。

このように見てくると、「古今集」以後の「かすみ」詠は、あらゆる景物を朦朧と包み込んでいる「かすみ」の風景をいかに表現するかを模索しながら、新しい表現を獲得していったということができる。いずれも「かすみ」の状況をより詳細に観察し、詠じる視点を変化させることによって生み出されたものである。これらは、まず「新古今集」の歌人達によって独創的な表現が多く見出され、さらに京極派の歌人達によって、一段と洗練された多様な表現が獲得されたのである。

（六）

ところで、こうした「かすみ」の表現の変遷において、いくつかの類型的表現が表れていることが注目される。特に「かすみに○○○」は、新しい歌風を生み出す仕掛けとも言うべき表現として、新古今時代の歌人達を中心に盛んに詠じられている。これらのうち、いくつかについては、佐藤恒雄氏[8]が、他の新古今時代の特徴的な表現とともに、平安漢詩文の影響下に生み出されたものであったことを、指摘されている。すなわち、「霞におつる」「霞にむせぶ」「霞のそこ」は、それぞれ「落霞」「咽霞」「霞底」といった、平安後期の漢詩文に多い表現を基盤にしているというのである。「かすみに○○○」や「かすみの○○」という表現の形は、漢語の読み下しに類似しているし、新古今時代の特徴的表現には漢詩の影響がしばしば見られるので、こうした表現には佐藤氏の指摘のもの以外でも漢詩文の影響は十分考えられよう。

例えば、「かすみのま」「かすみのうち」はそれぞれ「霞間」「霞中」などの漢語と概ね対応していることが考えられる。「かすみのま」「かすみのうち」は前述した如く、すでに「古今集」及び「拾遺集」に見えるもので、家集などを見ても前者は「能宣集」「元輔集」、後者は「和泉式部集」「清輔集」など平安中期以後の集には何例か見出せる。一方、漢詩表現では「本朝無題詩」に「雁陣漸消春霧裡　林梢半出暖霞間」（春日桂別業眺望　孝言）、「雲外雁音望已断　霞間鶯語曲猶新」（春日世尊寺即事　在良中右記部類紙背漢詩にも）、「猿叫雨深渓霧底　鳥声日暮嶺霞中」（遊山寺　忠通）などを見出すが、和歌の例より時代が下っている。これらの語を「佩文韻府」などによって見ると、「霞間」

「霞中」ともに見出すことができない。これらは本来漢語としては、使用の多い語ではなかったのであろう。また、正応三年（一二九〇）八月になった「賦光源氏物語詩」に、野分の巻で「孝子争厭風雨難　春曙霞間桜一片」、若菜上の巻に「曙聞清韻霞中鳥　晩引余香花下猫」とあるが、これらはいずれも和文の翻訳である。したがって、「かすみのま」「かすみのうち」は、漢詩よりもむしろ和歌的表現として成長したもので、逆に平安後期に漢語化されて入ったものと見るべきかもしれない。そうであったとしても、「かすみのま」「かすみのうち」という歌語の成立、その漢語への影響には、「〇間」「〇中」という漢語が多くあるという背景があってのことであろう。

この他の「霞」と「かすみ」表現の対応を見ると、「かすみにとづる」は「封霞」（類聚句題抄）・「かすみにあまる」は「余霞」（本朝無題詩など）・「かすみにのこる」も「余霞」・「かすみにきゆる」は「消霞」（資実長実両卿百番）・「かすみにこめて」は「籠霞」（本朝無題詩）・「かすみのにほひ」は「霞匂」（善秀才宅詩合）・「かすみのした」は「霞下」（本朝無題詩）などが対応しそうな語として考えられる。これらのうち、「かすみにこめて」はすでに「家持集」「遍昭集」に、「かすみにとづる」が「紫式部集」に一例あるだけで、あとはすべて新古今時代の表現である。また、これらの漢語表現は、「余霞」が「佩文韻府」に見えるだけであり、本来漢語としてはあまり使用されなかった語のようである。これらは、漢詩の例が和歌表現には先行しているので、歌語の漢語化とは言えないが、「霞」が我が国で和語的意味を付与されてから使用された語かもしれない。したがって、新古今時代、あるいはそれ以後の一連の「かすみ」表現は、こうした和語的漢語を背景としながら、つぎつぎと生み出されたものと考えられる。

（七）

このように「かすみ」表現を通史的にみてくると、「万葉集」から盛んに詠じられた「かすみ」は、叙情と叙景が一体化して春の憂情が多く詠まれた「万葉集」の詠と、叙情と叙景を区別し、朦朧と「かすみ」に遮られた風景の表現の多様化を図った、「古今集」以降の詠との間で、大きく「かすみ」の表現は変化した。「古今集」以後では、「新古今集」を中心に視点を変えた新しい表現を獲得したが、この背景には和製漢詩との緊密な関わりがあった。「万葉集」の詠でも、家持周辺では漢詩の影響が見られたが、これらは中国漢詩の叙情を主に取り込んだのに、「古今集」以後は和製漢詩の語表現の影響が主流であった。また、平安後期の新

しい表現では、必ずしも漢詩文からの一方的な影響ではなく、漢語を読み下して得た表現をもとに、相互に影響しあいながらのものであった。すでに、佐藤氏[9]も論考の中で強調されてきたように、平安後期から新古今時代にかけての歌壇の歌人達の多くは同時に詩人でもあったのであり、彼らの詩はほとんど和歌と同じ基盤にたっており、その表現は非常に和歌的な一面を持っていた。彼らは同じ意識のもとに漢詩も和歌も詠じていた。これは玉葉風雅の歌人たちも同じことであり、「かすみ」の新しい表現はこうした状況の中で生み出され発達したのである。ちなみに、これら宮廷を中心とする漢詩文にたいして、例えば、中世の五山文学などでは「かすみ」を詠じたものは非常に少なく、和歌の影響をほとんど見出せない。これは、「かすみ」が中世まで、和歌的和語的素材であったことを如実に物語っている。

注

(1) 拙稿「歌語「かすみ」成立と「霞」—四季感と色彩感に注目して—」(『和漢比較文学研究』一九八九・一一)

(2) 「万葉集」は小学館『日本古典文学全集』を底本としたが、便宜上歌番号は『新編国歌大観』の番号を示した。また、「古今集」以下の勅撰集は全て『新編国歌大観』を底本とした。

(3) (1)に同じ。

(4) 「風土記」は『日本古典文学体系』を底本とした。

(5) 『古今集以前』(塙書房 一九七六・二)

(6) 「『古今集』における〈景物の組合せ〉—花を隠す霞・紅葉を染める露—」(『国語と国文学』一九八九・一二)

(7) (1)に同じ。

(8) 「新古今的表現成立の一様相—『むなしき枝に』『露もまだひぬ』をめぐって—」(『和歌と中世文学』一九七七・三)、「新古今的表現成立の一様相(続)—『露の底なる』をめぐって—」(『中世文学研究』一九七八・七)、「新古今的表現の基盤としての平安朝漢詩—「霞におつる」「岩間にむせぶ」「はらひはてたる」の場合—」(『日本文学』一九七九・六)など。

(9) (8)に同じ。

付記 本稿は一九八八年秋の和漢比較文学会において口頭発表したものの一部です。注(1)にかかげた拙稿もあわせて、参照いただければ幸甚です。席上、多くの御教示を賜った会員諸兄に謝意を表します。

表1　万葉集・勅撰和歌集における「かすみ」詠

歌集名	総歌数	霞歌数	表現例（体言）	表現例（用言）
万葉集	4540	78 (19)	かすみ49　あさがすみ9　はるがすみ18	かすむ2　かすみゐる1　かすみがくる1　（たなびく38　たづ26）
古今集	1100	30	かすみ5　かすみのころも1　かすみのま1　はるがすみ21　はるのかすみ1	かすむ1　（かくす4　こむ1　たなびく5　たちかくす2　たちみつ1　ながす1　みだる1　かかる1）
後撰集	1425	18	かすみ8　かすみのわかれ2　はるがすみ6　はるのかすみ2	（たつ9　たなびく1　わく1　たちわたる1　まがふ1　ふきとく1）
拾遺集	1351	29	かすみ14　かすみのうち1　はるがすみ10	かすむ3　かすみこむ1　（たつ12　たなびく2　ふく1　つつむ1　とびわく1　まどふ1　むすぶ1　ふかし1）
後拾遺集	1218	27	かすみ16　かすみのうち1　はるがすみ4　はるのかすみ1	かすむ4　かすみこむ1　（たつ4　へだつ3　まどふ1　たなびく6　たちかへる2　たちいづ1　うづもる1）
金葉集	665	10	かすみ3　はるがすみ4	かすむ3　（たつ2　へだつ2　たちかへる1　たなびく1　たちかくす1）
詞花集	415	7	かすみ4　はるがすみ1	かすむ1　かすみこむ1　かすみわたる1　（たつ1　たなびく1）
千載集	1288	24	かすみ13　かすみのうち1　かすみのころも1　はるのかすみ1	かすむ3　かすみこむ2　かすみしく1　（かかる1　たつ5　へだつ5　とづる1　まがふ1　こむ1　うかぶ1　わく1）
新古今集	1978	39	かすみ16　かすみのうち2　かすみのそら1　かすみのま1　あさがすみ1　はるがすみ5　はるのかすみ1	かすむ13　かすみやる1　（たつ4　たちまよふ1　たゆ1　たちおくる1　ふきとく1　たなびく5　なびく1　たなびきわたる1　わく2　おつ1　まがふ2　ふかし1）
新勅撰集	1374	48	かすみ19　かすみのころも1　かすみのそこ1　かすみのふもと1　かすみのをち1　はるがすみ3　ゆふがすみ2	かすむ12　かすみかぬ1　かすみしく1　かすみわたる1　かすみゐる1
続後撰集	1371	45	かすみ11　かすみのいろ1　かすみのころも4　かすみのそで2　はるがすみ9　はるのかすみ1　あさがすみ4	かすむ10　かすみしく1　かすみゆく1　かすみわたる1
続古今集	1926	64	かすみ11　かすみのうへ1　かすみのころも6　かすみのそで4　はるがすみ4　はるのかすみ3　ゆふがすみ3	かすむ30　かすみゆく1　かすみわたる1
続拾遺集	1459	57	かすみ21　かすみのうへ1　かすみのころも1　かすみのした1　かすみのそで1　かすみのたえま1　かすみのつま1　かすみのひま1　か	かすむ21　かすみあまぎる1　かすみへだつ2

			すみのま2　あさがすみ2　はるがすみ1	
新後撰集	1381	46	かすみ11　かすみのうへ1　かすみのうら1　かすみのころも2　かすみのそこ1　かすみのなかそら1　かすみのま1　はるがすみ3　はるのかすみ1	かすむ22　かすみそむ1
玉葉集	2800	91	かすみ33　かすみのいろ5　かすみのそこ2　かすみのそで1　かすみのそと1　かすみのま1　はるがすみ7　はるのかすみ2　ゆふがすみ3　ちへのかすみ1	かすむ26　かすみいろづく1　かすみくる1　かすみこむ1　かすみなる1　かすみのこる1　かすみゆく4
続千載集	2143	32	かすみ13　かすみうへ1　かすみのうら1　かすみのおく1　かすみのころも1　かすみのま1　かすみのよそ1　あさがすみ2　はるがすみ2	かすむ7　かすみそむ1　かすみなる1
続後拾遺集	1353	21	かすみ18　かすみのまそで1　あさがすみ1　はるがすみ3	かすむ13
風雅集	2211	59	かすみ19　かすみのいろ2　かすみのうち2　かすみのうへ1　かすみのきは1　かすみのした3　かすみのそこ1　かすみのそら2　かすみのにほひ1　はるがすみ1　ゆふがすみ1	かすむ16　かすみかぬ1　かすみくる1　かすみにほふ1　かすみふく2　かすみゆく1　かすみわたる3
新千載集	2365	50	かすみ13　かすみのいろ1　かすみのうち2　かすみのうへ2　かすみのおく1　かすみのきた1　かすみのころも2　かすみのそら1　かすみのみだれ1　あさがすみ1　はるがすみ3	かすむ15　かすみしく1　かすみそむ1　かすみながる1　かすみへだつ1　かすみわたる1
新拾遺集	1920	48	かすみ16　かすみがくれ1　かすみのおく1　かすみのころも3　かすみのせき1　かすみのそで4　かすみのま1　かすみのをち1　あさがすみ1　はるがすみ2	かすむ10　かすみそむ2　かすみゆく1　かすみわたる1
新後拾遺集	1426	34	かすみ3　かすみのうへ2　かすみのうら2　かすみのころも3　かすみのそこ1　かすみのそで1　かすみのをぶね1　はるがすみ3　かすみがくれ1	かすむ9　かすみあまぎる1　かすみく1　かすみこむ1　かすみしく1　かすみへだつ1
新続古今集	2144	50	かすみ25　かすみのうら2　かすみのころも1　かすみのそこ1　かすみのそで1　あさがすみ1　はるがすみ3　ゆふがすみ1	かすむ12　かすみしく2

注記　万葉集の（　）内は非春歌数。「かすみたつ」は用言とみる考え方もあるが一応，すべて「かすみ」と「たつ」の結合したものとみたなど，別の見方もあり，数値は目安と考えたい。また，用言例の（　）内は，「かすみ」と共に使用されている語を八代集についてのみ，参考に掲げた。